

動感形態の直接的呈示方法について
～柔道における「崩し」指導から～

太田徹郎

川口鉄二

キーワード：動感呈示，崩し 柔道

About a direct dynamic exhibition method
～ From the instruction of "kuzushi" in judo～

Tetsuro Ota

Tetsuji Kawaguchi

Abstract

This study studied the direct exhibition methodology that became effective by a learner from the situation of morphologie. I took up "the pulling down technique" of the judo competition as a study, and guidance and the leader who used guidance by the normal language, a video picture weighed the guidance that I made directly, a difference I resembled it, and to depend against a learner.

The cases that there was not with the thing that the affirmative answer understood a real way of the judo player by a thing of technical guidance were often found.

By the video observation by the judo player. It is the thing which was able to see it through in the technology of the "Kuzushi".

Among six players who were able to see through the technique of the pulling down, it was only one that I was able to reproduce the real situation.

The other players could reproduce the technique of the pulling down as a result that I "crossed it and taught" it, and a leader did it, and the report that it was easy to understand most was provided.

In addition, I was able to reproduce a video picture.

Because I was like this, I paired with a learner in judo directly, and dynamism was extremely effective for exhibiting it as a method conveyed the dynamism contents which it was not able to stream down by a language and the guidance by objective sight exhibition.

This guidance method is based on ability for basic movement of the practical skill leader, and it is important that I always maintain this ability by training.

Key words: A dynamism exhibition method, Kuzushi, judo

I 序

スポーツ指導の現場において、指導者と学習者の間で動きを「伝える—承ける」という営みは多くの場合、教える側は絶対的の上位に立って「教えてあげる」、そして、学習者側はその指導を受け入れ、「教えてもらう」という関係が一般的な光景である。柔道競技の稽古においても、選手（学習者）は指導者の指示に対して殆どが、素直な返事に終始する。スポーツの指導が時として、礼節的態度や行動様式の学習という教育的な効果を期待されてしまうにしても、そこで動きの学習が中心に置かれている限り、発生指導の適否が問われることになるのは言うまでもない。

このような関係の中で、学習者が「わかりました」と言えば、指導者は意図した動き方を、学習者に伝えることができたものと捉えてしまう。しかし、練習に戻っても全く変化が見られなければ、学習者の能力上の問題として諦めたり、あるいは、指導者側の意図や指導内容をわかりやすくしようと映像機器を利用したりする。

金子は処方構成分析としての動感呈示について、学習者に受け入れられる動感呈示の志向形態を適切に示すことは容易ではなく、そこに指導者としての力量が問われるほどの重要性があると指摘する⁴⁾。このことは、学習の効率を上げるために客観的かつ詳細に呈示された映像がもともとの目的である「動感の習得」「動感の発生」とどのように結び付くのかを確認することの重要性を示すものでもある。

II 研究目的

映像機器の発展によって呈示される情報

量が豊富になり、かつ、高度化されることが、本当に学習者の理解と結びついているのだろうか。というのも、種目によってはこのような機器を用いなくても、高度な競技力を発揮している実践例も決して珍しくはないからである。外見的には指導に効果的であるように見えても、そこに本当に動きの共鳴化が認められるのか確かめなければ、そのような機器がどのように利用すべきかという方法論も見失ってしまうものと思われる。

一方で、昔から柔道の指導で行われてきた指導者との「組み稽古」は単に、指導者の熱意を伝えるためや、強さの体験による動機づけという効果を狙ったり、あるいは、指導者側にそのような最新の機器を利用する能力が無いという理由で行われているのであろうか。指導者が問題となる動きの模倣を行い、その解決方法を実際の掛け合いの中で伝えていこうとすることは、動感呈示の処方論としてはどのように位置づけられ、どのような意味を持つのであろうか。本研究はこのように指導者に要求される動感呈示の処方構成化能力を明らかにするために、柔道における「崩し^{注4)}のコツ」を題材として、より有効となる直接的呈示方法論をスポーツ運動学の立場から検討していこうとするものである。

III. 観察能力の実態把握

指導者の処方構成化能力を検討するにあたって、事前に現行の呈示方法論の問題点を明らかにしておく必要がある。そこで、学習者がどの程度のレベルで「崩しのコツ」を観察できているのかを調査することとした。

1. 調査対象技

一流選手の技のビデオ映像を学習者に呈示し、その映像から、一流選手の技の崩しにおけるコツややり方などを調査用紙に記述させた。学習者に呈示した技の映像は以下の計4本である。

- ①金丸選手による背負い投げ
- ②野村選手による背負い投げ
- ③井上選手による内股
- ④上野選手に選手による内股

2. 分類方法

学習者の記述内容には多様な表現が用いられていたのだが、それらが事前に検討され、実際に用いられたと思われるコツと、どの程度関連しているのかを明らかにする必要がある。

柔道の技の教本には一般的な崩しの方法は記載されていても、無数にある選手同士が生み出す状況に見合った崩しの方法などは記載されていない。したがって、「崩しのコツ」を分類する際には、そのための基準を示す必要がある。今回は講道館杯及び国際大会で優勝した実績を持つS大学柔道部の監督と、同様に現在、同大学にて女子柔道部の監督の二名による厳密な観察及び分析結果を踏まえ、4者の映像の中で用いられたコツの内容を明らかにするとともに、評価基準として定めた。

3. 調査対象者

S大学柔道部員39名（男子11名、女子28名）

4. 調査結果

専門的な観察・分析の上で明らかにされた4選手の技の中で用いられた「崩しのコツ」に基づき、39名の観察記述内容を検討したところ、「崩しのコツ」として示された

内容に当てはまると思われる回答には、自らの動感意識を表している記述内容が多く、反対に当てはまらない回答では、映像の表面的な変化に基づいた動きの記述内容が多いという二つの傾向が見られた。このようなことから、競技経験や当該技が得意技であるかどうかといった、見る側の呈示された映像に対する共感能力の違いが観察結果に影響を及ぼすものと考えられる。

IV 処方実験

1. 実験手順

調査結果を評価基準と照し合せ、「崩しのコツ」が理解できていると思われた学習者に対して、実際に自らの身体でそれを再現することができるのかどうかを試みてもらった。

その後、指導者の共鳴化能力を動員して分析・構成化した「崩しのコツ」を、学習者と直接組み合わせるという呈示方法を用いて処方し、その後、再度、ビデオ映像に映し出された技を再現させた。

そして、この双方の技にどのような変化があるかを明らかにするために比較・考察を行った。

2. 実験方法

観察能力調査のうち、ここでは金丸選手の崩しに対して適正なコツを記述できた学習者を対象に、実際にコツの再現を試みてもらった。

4選手のうちから金丸選手の背負い投げを選出した理由は、崩しの良否により学習者自身の動感に明確な変化が出やすいと考えたからである。金丸選手が行った背負い投げの状況とは、相手選手に強く引き付けられ、うまく崩すことができなければ、こ

の引き付ける力により技を返されたり、体勢を崩してしまい、投げるのが難しい拮抗した関係に置かれているものである。このようなことから、崩しの良否が投げの成否に大きな影響を与えると考え、分析対象として選定した。

崩しを再現をする際には、指導者がビデオ映像に示された「受け」の状況を直接学習者に伝え、なるべく同様の「受け」を再現できるように説明を行った。

次に指導者が学習者の受けになり、実際に組んで動きの感覚を呈示し指導を行った。この指導者が直接学習者と組んで指導するということは、指導者が学習者の柔道衣をつかみ、実際の引きつけの強さを再現しながら問題の場面の状況を作る。そして、学習者の体をどのように動いたらよいか誘導する方法である。

そして指導の後、学習者には先ほど担当した「受け」を相手にして、もう一度同じ条件で再現させ、双方の技はビデオ映像として収録され分析資料とした。ビデオ映像から1/30sec. 毎に静止画を100コマ抽出し、その中から最も機能的で重要と思われる局面を選び出してキネグラムを作成した。

また実験終了後、学習者から自己観察内容をインタビューにて聞き出し考察に用いた。

3. 実験対象者

S大学柔道部6名（男子2名，女子4名）

観察実験にて金丸選手の「崩しのコツ」を記述できた学習者を対象者としている。

4. 指導内容

金丸選手の背負い投げの状況とは金丸選手右組，相手選手左組のケンカ四つで，相手選手の釣手で強く引きつけられている状況から，体全体で相手選手の右方向，つま

り金丸選手から見て左前隅に崩し右背負い投げで一本を取った場面である。

この金丸選手の背負い投げの「崩しのコツ」とは，相手選手（写真1-左）が左釣手で金丸選手（写真1-右）を強く引きつけている状況を（写真1），金丸選手が体を起して胸を開くように相手の重心を不安定な体勢に移動させ（写真2-右），相手の耐えることのできない方向に技をかけているという動き方である。この崩しのコツに基づいて指導者が直接学習者と組んで動感呈示するようにした。

指導者が直接学習者と組んで動感呈示するということは，指導者が指導する場面の状況を，学習者の体を誘導するようにして動感を確認しながら指導することである。誘導するにあたっては，学習者が最初に再現した技を，指導者が学習者の動きに乗り移って観察し，修正箇所を見つけ出すようにした。修正箇所をどのように修正したらよいかを選手同士の力動的駆け引きを踏まえた上での姿勢や力の入れ方，最も投げやすい方向などを指導した。

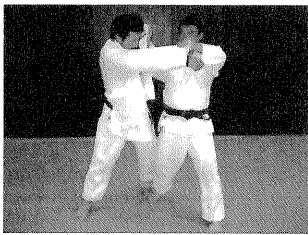
なお，学習者の背負い投げには膝を着いて投げる方法と膝を着かずにしゃがみこみ，しゃがみ込んだ状態から立ち上がるように投げる方法の2種類の背負い投げが見られるのだが，どちらも手技に俗称をおく背負い投げの定義に反していないためここでは双方とも同じ背負い投げと考えることにした。

- ・相手選手に強く引きつけられている状況 (写真 1)



(相手選手) (金丸選手)

- ・金丸選手が体を起して胸を開くように崩した局面 (写真 2)



(相手選手) (金丸選手)

5. 処方実験の結果・考察

処方実験の結果からビデオ映像を学習者に見せ再現させる際には6名中5名の学習者が思うように再現できないという結果になった。処方実験対象者は観察実験で「崩しのコツ」を見抜き、理解しているはずであったが、自らの体で再現しようとしても、頭の中で描いていた客観的な選手の動き方や、選手と相手選手が生み出す力動的関係などは、明確に再現できなかったようだ。しかし、1名の学習者については「崩しのコツ」を踏まえて再現することができていた。再現することができなかった学習者と再現することができた学習者の違いは、共感能力のレベルに違いがあるのではないかと考えられる。まず映像を観察する際に表面上に起きた崩し方を見ることができかどうか問われ、見抜けた学習者の中でも、そのような場面でどのように崩したらいい

のかという、形式化された課題に適応した崩し方を理解し、実際に実施することができる学習者と自分の動感として映像内の動き方に共感できる学習者に分けられると考えられる。今回の場合は、前者が再現できなかった5名の学習者で、後者が再現することのできた1名の学習者だと考えられる。映像内の動きを観察できていても、実際に体を動かして再現を試みようとする際には、自らの動感上のやり方として観察することができなければ、再現することのできた1名の学習者のようにうまく状況に合わせて相手選手を崩し、投げることはできないのであろう。

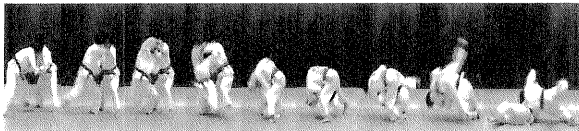
このことからビデオ映像を呈示し、学習者が「崩しのコツ」を理解できたように見えても、実際に再現しようとした際には、自らの動感として映像を観察することができなければ、その身体知は空虚にとどまってしまうものと考えられる。指導者側がビデオ映像を学習者に呈示する際には、このような意味で理解しているかどうかを確認しなければ、単に客観的に観察するよう促しているに過ぎないのである。

よって、ビデオ映像による動感の発生指導には学習者の観察能力の違いによって効果が全く異なってくる。このことを理解せずに指導したことになってしまうのでは、それは正に「ビデオコーチ」でしかない。

そこで指導者が直接、学習者と組み合せて「崩しのコツ」を処方すると、学習者6名中6名が処方後に直接組みあった指導方法が理解しやすく、投げやすいと自己観察報告において述べていた。「崩しのコツ」を踏まえて再現することができていた1名の学習者の例においても、指導後の自己観察

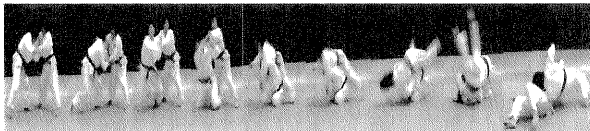
報告から「投げやすかった」と答えていた。具体的な技術面では、崩すための引き出す方向や、釣手の使い方、体の使い方などがわかりやすいと述べていた。学習者が映像から見ることのできなかつた、選手と相手選手が生み出す力動的関係などを、指導者が代行しながら直接組合うことで学習者の身体知としての動き方や体の使い方などの、動ける感覚を発生させることができたのではないかと考えられる。

・ビデオ映像を再現した技（S選手の例）



→1 2 3 4 5 6 7 8 9

・処方後に再現した技（S選手の例）



→1 2 3 4 5 6 7 8 9

・自己観察報告（S選手の例）

指導者「ビデオ映像を見て感じ取った動き方を再現することはできましたか。」

S「できませんでした。」

指導者「実際にやってみて、自分ではできたような感じはなかった？」

S「はい、頭ではこっちの方だとわかっているのですが、引けてなかったり、体が入って行けなくてできませんでした。」

指導者「では、指導者が組んで指導した時とビデオ映像から見て感じ取った動き方を、再現したときでは、どちらがどのように投げやすく、相手を崩していると感じましたか？」

S「教えてくれた方が、引手の方向だけでなく頭の位置とか、引くのにも、体全体を使うことを教えていただいて、分かりやすかった

です。」

指導者「指導者が組んで指導したさいには、動き方や動きの感覚など理解しやすく再現しやすかったですか？」

S「はい。」

指導者「指導者に組んで指導を受けてどのようなことが具体的に分かりやすかったですか。」

S「体で引く時に頭を上げて引いた方が、相手が出やすいことです。」

指導者「では、指導者のどのような指導方法が分かりやすかったですか？」

S「言葉で言って自分がやって、指導者がまた伝えてくれたと、交互に教えてくれたことが分かりやすかったです。」

V. 考察のまとめ

学習者が自己観察内容として書き出した動感言語の違いにより、同じ映像を用いても、見る側の映像に対する共鳴化能力の違いによって、映像の中の選手の動きを自分の動き方としてよく理解できたり、できなかったりすることが明らかとなった。つまり、呈示された映像如何にかかわらず、その映像を観察・交信し、自らの動きとして代行できるかどうかというのは一定ではなく、学習者側の能力に左右されるということである。そこではもちろん、対象となる技の類似した運動経験が大きな影響を持つことになる。

このうち、一定の観察能力を持ち、「崩しのコツ」を見抜き、理解していると思われた学習者であっても、そのコツを具体的な状況とともに自らの身体で再現させると、崩しの映像から組み立てた自らの代行イメージは、とりわけ、掛ける側と掛けられる側の選手が組んだ際に生み出される力

動的な関係においては、明確な再現が出来ていなかった。

映像を観察する際には自分の動感を引き合いに観察することが重要になり、その「崩しのコツ」に固有な動感を問うことなく、ビデオ映像を呈示しただけでは、学習者に客観的に映像を観察するように促しているに過ぎないようである。ともあれ、ビデオ映像による動感の発生には学習者の観察能力の違いによって殆ど効果が示されなかったり、一定の共感が示されたとしても、具体的な状況まで読み取ることは困難な場合が多いようであった。

そこで指導者が、学習者と直接組み合せて「崩しのコツ」を直接呈示したところ、それまでは視覚的映像を自らの身体知にどのように置き換えるべきかを試行錯誤していた学習者は、その自己観察報告から、「崩しのコツ」を理解しやすく、投げやすいことが理解できたと述べていた。具体的な面では、崩すための引き出す方向や、釣手の使い方、体の使い方などがわかりやすいと述べていた。指導者が直接組み合、崩しのコツを処方することで学習者の身体知に、動き方や体の使い方などと、動ける感を発生させることが出来たのではないかと考えられる。

このようなことからビデオ映像を呈示し外形的な問題点を指摘するだけでは、学習者に新しい動きを発生させるためには決して十分な方法とは言えず、柔道のように対人競技では力動的駆け引きが視覚的变化としてはなかなか伝わりにくい状況が多いため、指導者が直接組み合せて動感を呈示することが最もわかりやすい方法として浮き彫りになった。

VI 結論

本研究では指導対象として取り上げた「崩しのコツ」は、「投げ」等の技の主動作に目を奪われ易いため、学習者の観察対象からは抜け落ちてしまい易いことが確認された。そして、「崩し」局面を観察できる際には自らの動感情報が不可欠であることが示された。

更に、個々の場面で用いられる「崩し方」を動感情報として把握するには、言語や視覚による呈示指導だけでは限界があることが示された。つまり、最新の視聴覚機器や分析映像が説明とともに呈示されても、学習者がそれによって動感メロディーを奏でることができない限り、それは猫に小判でしかないのである(5:244-245)。自得任せの学習活動で良しとできるならまだしも、競技や体育学習の場面ではより効果的な促発指導の方法論が求められるべきであることを考えると、学習者と直接的に組んで動感呈示する手法は、改めてその意義と内容を確認する必要があることが示唆された。

もちろん、指導者にはこのような実的な動感呈示能力を常に維持し、向上させるための努力が必要となる。指導者が自ら組んで呈示する場合には適正な「動感模倣構成化能力」(5:241 頁)が前提となるのだが、今回はその点を十分に検証した上での論展開でなかったことは今後の課題としたい。

参考文献

- 1) 石井孝法, 岡田宏隆, 増地克之, 坂本道人, 小俣幸嗣, 柔道投技における崩しの基礎的研究, 武道学研究 40, 11-16, 2008
- 2) 射手矢岬, 木村広, 川内谷一志, 廣瀬仲良, 竹内義徳, 柔道の技術練習への時間

- 遅れビデオシステム（DVS）の導入，
講道館柔道科学研究会紀要，第9輯，
137-146，2002
- 3) 金子明友，運動観察のモルフォロジー，
筑波大学体育科学系紀要第10巻，1987
- 4) 金子明友，身体知の形成 上巻，明和出版，2005，80頁，128-132頁，
- 5) 金子明友，身体知の形成 下巻，明和出版，2005
- 6) 金子一秀，運動の修正指導，運動学講義，
大修館書店，1990
- 7) 嘉納行光，醍醐敏郎，川村禎三，中村良三，佐藤宣踐，柔道大辞典，アテネ書店，1999
- 8) 川口鉄二，観察トレーニングに関する一考察，東北体育学研究紀要，vol 15
- 9) 川口鉄二，モルフォロジー的運動分析に関する一考察，仙台大学紀要，16集，39-50，1984
- 10) K・マイネル，金子明友訳，マイネルスポーツ運動学，大修館書店，1981，127-130頁，
- 11) 三戸範之，柔道投技におけるフェイントの方法，秋田大学教育文化学部研究紀要，教育学部62，2007
- 12) 嶋田出雲，スポーツ・コーチ学，不昧堂，1998
- 13) 醍醐敏郎，講道館柔道・投技（上巻），本の友社，1999
- 14) 醍醐敏郎，講道館柔道・投技（中巻），本の友社，1999
- 15) 醍醐敏郎，講道館柔道・投技（下巻），本の友社，1999
- 16) 松本芳三，柔道のコーチング，大修館書店，1975